



# 変わりゆくポーランドの サッカー事情 (1)

津田晃岐

私はこの4年間、ポーランドの西部の町、ポズナン市に住んでいる者だが、かつて北海道大学で学んでいたことから、札幌とも縁が深い。また、東京外国大学のポーランド学科にいた時には、ポーランド政府の奨学金をもらい、1998年から2000年にかけてクラクフ市に留学することができた。現在、ポズナン市の外国語大学で教えていながら、ポーランド人がいかに日本を見ているか、そしてポーランドがどのように変わったかを興味深く眺めている。そこで、変わりゆくポーランドの現在について報告を勧められた切っ掛けもあり、喜んで筆を執ったものである。

## 1. 「ボール遊び」

ポーランド人に最も人気のスポーツは、サッカーである。これは今も昔も変わらない。

休日の日中や平日の夕方、サッカーの試合が行われる時には、男たちが近所のパブや街中のバーに集まり、ビールを片手に最頂のチームを応援したり、批評したりする。女性の多くはそれを半ば呆れ顔で眺めているが、一緒に盛り上がっている者もいる。子供たち、とりわけ男子たちは、そうした父たち、男たちの姿を見ながら、自分もいつかその輪の中に入りたいと心ひそかに思っている。もちろん、個人宅に家族や友人が集まって観戦している場合もある。そして、ゴールの瞬間には、それこそ地鳴りのような雄叫びが辺りを包む。サッカーに興味のない者も、その時にはさすがに、今日がサッカーの試合日であることを知る。サッカーをめぐるポーランドで繰り広げられている伝統的な風景である。



ポーランド語でサッカーを「piłka nożna」、つまり「足球」と言う。英語の「football」の音を写した「futbol」という語が使われることもあるが、たいていは「piłka nożna」と言う。そして、ポーランド人が単に「gramy w piłkę ボールで遊ぼう」と言う時、サッカーを指している場合がほとんどである。



サッカーに対するポーランド人の熱狂ぶりは、何も FIFA ワールドカップや UEFA 欧州選手権やオリンピックのような、ポーランド代表が戦う国際試合に限ったことではない。ポーランドには、「ekstraklasa エクストラクラサ」を頂点

として、いくつものプロサッカーのリーグ (I 部リーグ、II 部リーグ東地区、II 部リーグ西地区、III 部リーグなど) があり、多くの町が自分たちのクラブチームを抱えている。そのため、リーグ戦の度に、あるいはカップ戦 (ポーランドサッカー協会主催の「ポーランドカップ」で、毎年開催される) の際に、そしてそれらを勝ち抜いて UEFA チャンピオンズリーグや UEFA ヨーロッパリーグに参加することになった暁には、それこそ熱い応援を地元民サポーターは送るのである。

(残念ながら、ポーランド代表が FIFA ワールドカップや UEFA 欧州選手権で優勝したことはなく、FIFA ワールドカップにはこれまで7回出場し、うち2度の三位を勝ち取っている。UEFA 欧州選手権では出場1回に留まっている。また、ポーランドのクラブチームで、これまで全ヨーロッパの大会で優勝したチームはなく、UEFA 加盟国の国内リーグでの前年度上位クラブが参加できる UEFA チャンピオンズリーグでは、「KP Legia Warszawa」と「RTS Widzew Łódź」が本大会に出場したことがある他、「KKS Lech Poznań SA」や「Wisła Kraków Spółka Akcyjna」など複数のチームが予選に参加したことがある。一方、UEFA 加盟国の国内カップ戦優勝チームと国内リーグ準上位チームが参加する UEFA ヨーロッパリーグでは、目立った成績がない。)



サッカー大会の最高峰  
FIFA ワールドカップ  
トロフィー

過去2度(1974年と1982年)三位入賞と計7回のワ

ワールドカップ出場を除いて、特にここ最近では、今ひとつ輝かしい成績に欠けるポーランドサッカー界ではあるが、しかし、ポーランド人のサッカー熱は一向に衰えることがない。まるでポーランドの文化や精神性の一部になってしまっているかのように、サッカーを愛してやまない。

実際、ポーランドでは、サッカーが青少年の心身育成に取り入れられている観がある。というのも、幼い頃からのサッカーボールを通じた人と人との触れ合いは、子供たちに他人との人間関係を形成する能力を身に付けさせると考えられているからである。あるカトリック系の子育て雑誌も最新号で、サッカーは子供たちの人間性と社会性を養う「人生の学校」であるとして、サッカーに教育的効果を期待している。ここには、(少なくともしばらく前までの)日本人が野球に抱いていた理想、つまり、キャッチボールを通じた親子の絆の構築、少年野球を通じた汗と涙の青春といった理想と同じような図式も見て取れる。

公立私立を問わず、小学校を中心に、少年サッカークラブが作られている。もちろん、中学校以上にもサッカークラブが作られている場合はあり、学校以外に民間の少年サッカーチームも存在する。さらには、教会の教区や施設にサッカーチームが作られている場合もある。当然、サッカーをするのは、何も子供や若者に限らない。いい年齢をした大人たちも、週末や平日夜の空いた時間に、仲間同士で近所の小学校のグラウンドや体育館などを借り切って、草サッカーをしばしば楽しんでいる。私も友人から「今度の金曜あたり、どう？」と声をかけられることがある。もちろん、飲みに行くのはなく、「ボール遊び」へのお誘いである。(つづく)



つだ・てるみち  
(ポズナン外国語大学講師)

次号もさらに興味深い内容をお伝えします！

変わりゆくポーランドの  
サッカー事情 (2)

＜UEFA 欧州選手権 2012 とは＞

ロゴとスローガンやマスコットについて  
インフラ面の遅れと混乱について  
ポズナン市公共交通機関について

＜サポーター地帯とは＞

カトリック教会について  
音楽グループについて



ポーランド伝統空手道連盟  
クフィエチンスキ氏が  
「旭日章」を受章！

東日本大震災被災者支援活動にみる  
ポーランドのこころ

ポーランド伝統空手協会会長、国際伝統空手連盟副会長である、ヴウオジミェシユ・クフィエチンスキ氏が、平成 24 年度春の旭日章を受章されました。授賞理由は、「伝統空手を通じた日本文化の普及及び相互理解の促進に寄与」です。

ポーレのバックナンバー(第 70 号11頁)でも紹介したように、クフィエチンスキ氏は、岩手県と宮城県気仙沼市の中高生 30 名を 7 月 24 日から 8 月 10 日までポーランドに招待しました。子供たちの震災で傷ついた心を癒し、笑顔を取り戻す一助となるようにとの思いからです。その活動に対する日本側からの評価と感謝の念が、受章につながりました。

子供たちの壮行会の様子は、ポーランド大使館のサイトでビデオが見られます

<http://www.tokio.polemb.net/index.php?document=506>



支援プロジェクトを  
伝える「ポーランド伝統  
空手道連盟」の  
ホームページ



ポーランドにおける日本の伝統武道に対する関心は非常に高く、柔道、空手、合気道、相撲、剣道等がとても活発。

# 変わりゆくポーランドの サッカー事情 (2)

津田晃岐

POLE 第 75 号(6月発行)10 頁からの続きです。

私はこの4年間、ポーランドの西部の町、ポズナン市に住んでいる者だが、かつて北海道大学で学んでいたことから、札幌とも縁が深い。また、東京外国大学のポーランド学科にいた時には、ポーランド政府の奨学金をもらい、1998年から2000年にかけてクラクフ市に留学することができた。現在、ポズナン市の外国語大学で教えていながら、ポーランド人がいかに日本を見ているか、そしてポーランドがどのように変わったかを興味深く眺めている。そこで、変わりゆくポーランドの現在について報告を勧められた切っ掛けもあり、喜んで筆を執ったものである。

## 2. 「順調」?

そうしたサッカーの4年に一度の祭典、UEFA 欧州選手権が今年2012年にポーランドで(ウクライナとの共催ではあるが)開かれる。UEFA 欧州選手権は、「Euro ユーロ」とも呼ばれ(たいていは開催年を付けて「Euro 2012」というふうには呼ばれる)、クラブチームではなく、各国の代表チームが戦う。今年の場合、6月8日から7月1日の日程で行われる。6月8日、ワルシャワの国立競技場で熱戦の幕が切って落とされ、7月1日のキエフで決勝戦が予定されている。



Euro2012の優勝カップ。  
4月30日、大会に先立って、  
ポーランド全国をお披露目旅行した。



この間、大会の準備は着々と進められてきた。2009年12月には、大会のロゴとスローガンが発表された。大会のロゴは、地域の動植物を意識したデザインになっている。中央にサッカーボールをあしらひ、その両側には共同開催国を表す二つの花が一本の茎から伸びている。中央のボールは大会の感動と情熱とを象徴し、茎は大会を支える機構、すなわちUEFAと欧州サッカー界を表している。色は自然界から取られており、森の緑、太陽の黄、水の青、空の水色、ブラックベリーの紫が使われている。スローガンは、共同開催を意識して「Creating History Together ともに歴史をつくる」。

また2010年12月には、大会のマスコットが決められた。マスコットは双子という設定で、ポーランドのナ

ショナルカラーである赤と白のユニフォームを着て髪を染めている方が「スラベク Slavek」、ウクライナの青と黄色を纏っている方が「スラフコ Slavko」である。名前はファン投票によって決められた。

そして2011年3月1日から3月31日にかけて、観戦チケットが発売になり、UEFA.comで独占的に販売された。用意されたチケットが140万枚だったのに対して、寄せられた申し込みは1200万件以上に達した。4月に公証人立ち会いのもと、UEFAによって公正な抽選が執り行われ、当選者には4月末までに電子メールで通知された。応募者の全体の88%が共同開催国のポーランドとウクライナの国民だった。

これまでオリンピックやメジャースポーツの世界カップを招致したことのないポーランドにとって、初めての、一大イベントである。ヨーロッパ各国の選手やサポーターを迎えるホスト国として、ポーランド人のサッカー熱がさらに高まるのも当然である。

そうしたポーランド人の熱狂ぶりに水を差すつもりはさらさらしない。大いに盛り上がりてもらいたい。しかし、このEuro 2012に関しては、決して面白いことばかりではない。それどころか、大会がまだ始まらないうちから、既に辟易しているポーランド人も実はかなりたくさんいる。特に試合の開催地に選ばれた都市の住民は、当初の喜びや誇らしさから一転、今ではある種の疲労感と倦怠感を日に日に募らせている。というのも、Euroのために、Euroに照準を合わせて始まったはずの準備が、もう大会が間近に迫った現在に至っても、一向に終わる気配を見せていないのだ。

2007年4月、ウクライナとともに2012年大会の開催地に選ばれて以来、ポーランドでは、熱狂の中、蜂の巣を突いたような工事ラッシュが全国で続いてきた。試合会場となる八都市の内、ポーランド側の四都市、ワルシャワ、ポズナン、ヴロツワフ、グダンスクでは、ワルシャワ国立競技場、ヴロツワフ市立競技場、アレ



ポズナン中央駅の新駅舎（右）と旧駅舎。  
新駅舎の後ろ半分は、実はまだ工事中  
（4月30日現在）。

ナ・グダンスクが大会のために新設され、ポズナン市立競技場も大幅に改修された。

その他、この四都市を結ぶ道路や鉄道の主要駅でも、軒並み工事や改築が始まった。空港でも整備が行われてきた。また会場の四都市の市内でも、これを機会に道路や公共交通機関の設備、はては観光名所や街角の噴水に至るまで、あちこちを工事、修理、改築、新設し始めた。

ポーランドのスポーツ観光大臣や首相はこの間、「準備は順調」と繰り返してきた。が、これが「順調」なのだとしたら、どういうのが「不順調」なのか、と問いたくなるのが、実際に住んでいる身としての率直な感想である。

例えば、私の住んでいるポズナン市の場合、鉄道でやって来る者にとっての玄関口、ポズナン中央駅が（旧駅舎のすぐ横に新駅舎が建設されているのだが）長きに亘る工事の末、試合まで二週間を切った時点でもまだ完成していない。また、中央駅とカポニェラ環状交差点（ポズナン市の交通の要所）とを結ぶ区間の道路が、既に一年以上工事中であるにもかかわらず、今なお完成していない。つまり、鉄道でポズナン入りしたサポーターは、建設中の中央駅から目と鼻の先にあるカポニェラ環状交差点まで（距離にしてわずか数百メートル）徒歩で工事中の地帯を歩いていくなか、公共交通機関（路面電車かバス）でぐるりと迂回して辿りつくしかないのだ。そうならないためには、奇跡でも祈るしかない。空路の玄関口、Lawica 空港は拡張工事を5月初めに何とか終えた。自動車でポズナン入りするサポーターのためには、もう二年以上前から少しずつ道路の拡張工事と整備とが市の周縁部から順に行われてきたが、ここ一年ほどはようやく市の中心部に至り、あちこちで道路が掘り返され、アスファルトが捲られ、敷石が剥がされ続けている。文字通り、市内の至る所が工事中、通行止め、穴だらけで、まるで何かの災禍の後の復興期にでもあるかのような混乱ぶりである。もちろん、試合会場となるスタジアム周辺も広々と掘り返されていたが、こちらの方はさすがにもう終わっているようだ。

Euroに向けた、Euroのための工事だったはずである。市民の多くは、もはやこの準備がEuroに間に合うとは思っていない。とっくに諦めてしまっている。今は

ただ、なるべく早く混乱が終わってほしい、平静を取り戻してほしいと願っている。そして冗談交じりに、こう言い合っている。「一体いつ終わるのかね?」「次のEuroには間に合うだろう」「いや、あと二、三回は必要だろう」。また、真面目に心配している者もいる。「パパ、いつまで続くの?」「そうだね、息子よ。父さんもイライラしてるよ」

当然の事ながら、この混乱の煽りを一番食っているのは、住民である。自動車通勤する者は、日々変わる道路工事の状況をチェックして、通行止めの箇所と迂回路とを毎日確認しなければならない。公共交通機関、特に路面電車を利用する者は、突然変更される路線にも慌てず素早く対処できる柔軟性を常に持っていなければならない。昨日と同じ路面電車に乗っても、今日は突然一つ手前の道路で曲がったり、曲がるはずの交差点を直通したり、ということがごく普通に起こる。乗客のほとんどは、その時点で始めて路線が変わったことに気づく。もちろん、各路面電車の正面には大きな文字で、時には赤字で、「路線変更」と書かれているが、一年以上にも亘って変更の上に変更を重ねてきた結果、今ではどれが元の路線だったのか誰も分からず、どういう路線をどのように変えた「変更」なのか一向に要領を得ない。乗客は車内で互いに尋ね合い、半ば不満そうに、半ば諦め顔で、黙って次の停留所で降り、昨日まで乗ったこともない新たな路線に乗り換えて、何とか目的地に辿り着こうとする。

ところで、ポズナン市の公共交通機関（バスと路面電車）は少し変わっている。多くの町では、定期券を除けば一回券が主流で、市内は料金一律、乗り換えた場合に次の切符を切るのだが、ポズナン市では15分と30分の時間券が主流で、乗車後、切符を切ると乗車時間が打刻され、15分以内なら乗り換えは何度でも自由なのだ。これは、人口の割には比較的コンパクトにまとまったポズナンという町の構造を反映したもので、実際、市内の多くの移動は15分で足りる。ところが、この道路工事の結果、バスも路面電車も迂回を強いられ、これまで15分で到達可能だった場所が15分で辿り着けなくなるケースが当然のことながら増えた。そこで、ポズナン市交通局MPKは、2011年9月26日からEuro直前の2012年5月31日まで、15分券の有効時間を25分間に、30分券を45分間に延長することを決めた。

### 3. 「サポーター地帯」

インフラ面の遅れと混乱は目を覆うばかりだが、その他の準備は着々と進んでいるようである。

大会が近づくにつれ、Euroやサッカーを特集した様々な雑誌や書籍が書店やキオスクに並ぶようにな

り、その数、種類は日に日に増えている。

また、デパートやスーパーや小売店でも、「サポーター地帯」の名の下に特別コーナーが設けられ、サポーターのためのグッズを用意している。例えば、Euro 2012 のロゴが入ったサッカーボール、T シャツやソックス、リュックサックや鞆、マグカップやビアグラス、赤と白に彩られたサポーター用のマフラーやメガホンや帽子といった応援グッズ、また、飲料やお菓子もサッカーボールの模様をあしらった Euro 用パッケージに変わっている。

「strefa kibica サポーター地帯」というのは、実は「パブリックビューイング」を意味するポーランド語で、スタジアムに入れないサポーターのための応援スペースである。今回は Euro の試合が直接行われない都市にも、大画面テレビと大人数収容可能なスタンドを備えた大規模な応援スペース「サポーター地帯」が作られている。

しかし一方で、サッカーに興味のないポーランド人、それどころか「サッカー」と聞いただけでアレルギーを起こしてしまうポーランド人、あるいはサッカー自体は嫌いでないもののマスコミのヒステリックな騒ぎぶりにうんざりしているポーランド人も、少数派ながらいる。そんな人たちのために、「非サポーター地帯」と銘打ち、アンチ・サッカーファンの避難所として機能し始めている場所もある。保養地あるいは景勝地として有名なザコパネ市、マズーリ湖沼地方、ビェシュチャディ山地などでは、町あるいは地域をあげて、「Euro 2012 のない町」あるいは「サッカーから自由な町」を謳い、静かさと安らぎを宣伝している。

ポズナン市でも、「Euro から自由な地帯」と銘打った小劇場「Mój Teatr 私の劇場」があり、「選手権期間中は Euro 2012 という言葉もサッカーという言葉も聞かれない」。「その代わりに芝居、コンサート、リサイタルや作家トークを提案します」と劇場オーナーは話す。

また、カトリック教会でも Euro のための準備が進められ、イタリア代表、オランダ代表、イングランド代表のキャンプ地に選ばれたクラクフ市では、ヨーロッパ各地から押し寄せるサポーターたちに備えて、各国語(英語、イタリア語、ドイツ語、ラテン語)でのミサが準備されており、英語、イタリア語、ドイツ語で告解(いわゆる「懺悔」)を行える準備も進んでいる。

さらに、サポーターたちの市内の移動の便を図るために、ポズナン市ではセルフサービスのレンタサイクルが市内数箇所設置された。クレジットカードやプリペイド式で利用される。レンタサイクルのステーションで本人認証した後、表示されるコード番号を自転車のロックに登録すると、ロックが外れ、自転車が利用できるというものである。レンタル料は、借りた時間によって変わる。返却の場合は、借りた場所に返すのが最善だが、追加料金を払って別のステーションに



ポズナン中央駅からカポニェラ環状交差点を眺める。完成まで程遠い？(4月30日現在)

返すことも可能である。

それからもう一つ、サポーターに関連して、現在ポーランドで話題になっているものがある。音楽グループ「Jarzębina ヤジェンビナ」の「Koko Euro Spoko コッコ、ユーロ、オックケー」で、大ヒットしている。

「ヤジェンビナ」とは西洋ナナカマドの実のことである。西洋ナナカマドはポーランド全土でごく普通に見られる樹木で、その赤い実はポーランド人にとって秋を告げると同時に、果実酒にしたりジャムにしたりと、親しみのある植物である。音楽グループ「Jarzębina」は1990年、Kocudza という村出身の女性たちによって結成され(メンバーは現在18名で全員女性)で、普段は Kocudza 村があるポーランド南東部、ウクライナとの国境付近に伝わる民謡や聖歌などを歌っている。歌の一部に方言を使用している他、ステージには出演する際には、村の伝統的な衣装を着ていることが多い。

「コッコ、ユーロ、オックケー」は、サポーターたちが応援の際に手拍子や足踏みやメガホンを叩きながら作るリズムを利用して歌われるが、ポーランドの昔ながらの村女を髣髴とさせる語り口も見られる。「hen すこぶる」のような古い表現と「spoko オックケー」のような現代的な表現とが混在している。ちなみに、「コッコ」は鶏の声を模した擬声語で、歌中に出てくる「スムダ」は、ポーランド代表の現監督 Franciszek Smuda 氏のことである。

コッコ コッコ ユーロ オックケー  
すこぶる高く ボールが飛ぶよ  
皆して一緒に歌おうよ  
うち等の者に 気合い入れるよ

うち等の逞しい男たち  
白と赤の男たち  
きっと勝てるさ  
スムダだって喜ぶさ  
へイ!

つだ・てるみち(ポズナン外国語大学講師)